篠原幸雄からやましたゆきおへ

マンガと生きた50年

24

友達の友達はみな友達

ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「マンガと生きた50年」は、東京都江東区・森下文化センターにて2017年10月20日（金）から29日（日）の会期で開催しました、新つれづれ草マンガ展「篠原幸雄からやましたゆきおへ　マンガと生きた50年」で展示した展示物を再構成したものです。

24、友達の友達はみな友達

始めた頃のワークハウス

ワークハウスの売上は決算を重ねる度に倍々に増えていきました。

依頼された仕事は必ず引き受けたので、仕事の数も増えたのですが、私のマンガ家としての感性頼りで作った企画やそのデザインが、他の編集プロダクションとは違う魅力が、読者の子供たちに伝わったのか、次の仕事へと繋がっていったのだと思っています。

仕事が急激に増える中で、私と相棒のＫｏｉくんだけではやり切れず、ワークハウスの仕事をたくさんの方が手伝ってくれました。

練馬高校の漫研の後輩その友達、ふしぎな仲間たちで知りあったマンガ家さんやスタッフの方々とその友達、銀英社時代にお会いした方とその友達、さらにさらにその友達を紹介して頂いたりと、ワークハウスとその仕事を中心にたくさんの人が集まって助けてくれました。

十分なギャラやバイト料ではなかったと思いますが、版元から頂いた編集費を赤字になたない様に、みんなでわけていました。

ワークハウスの仕事に魅力を感じ、集まって仕

事を助けてくれた仲間、同志、友達の集まりで、私自身も先頭に立って、企画構成デザインの仕事を必死にやり続けていたので、皆も同じ気持ちで、ワークハウスの一員になってくれていると信じていました。

仕事場（ワークハウス）を拡大していく

初めは自転屋さんの二階の十坪ほどの事務所だったのですが、すぐに狭くなり少し離れたマンションの二階に2DKの部屋を借り、二段ベッドを入れて徹夜で仕事をしたときに仮眠できるようにしました。

ファミコンゲームの解析や撮影で昼夜問わず続けなければ間に合わないことが続いてからです。

最初に借りた事務所のすぐそばのマンションの二階に、大きめな事務所スペースが空いたので、会社を移転することになりました。

その後一階の部屋が空くとそこも借り、比較的短期間にこのマンションに、二階の一部屋と一階の二部屋を使うようになっていきました。

徳間書店のテレビランド編集部、小学館の少年サンデー編集部、てれびくん編集部、ケイブン社の大百科編集部、秋田書店の第二編集部など、編集プロダクションとして、仕事の依頼を順当に頂けるようになってきました。

特に徳間書店テレビランド編集部のSuzu氏との仕事は、ファミコン、ラジコン、プラモなど子どものホビー関係を扱った企画がどんどん実現していきました。

私はワークハウスにこもり、スタッフと一緒に

企画編集構成デザインの作業をひたすらやり続けて、夜中過ぎになるとＳｕｚｕ氏が近くのコンビニで買った両手一杯の差し入れを持って現れ、完成した原稿のチェックを片端から済ませ、それを巨大な封筒一杯にして大日本印刷に持っていくのでした。

一週間に何冊も大日本印刷から届いた校正紙をチェックして、校了作業をしていました。それでも間に合わない時は、夜中過ぎに大日本印刷の出張校正室に詰めて、校了作業を繰り返していました。

「ホビーボーイ」（徳間書店発行）ファミコン、プラモ、ラジコン、フィギュア、モデルガンなどのホビー専門誌、季刊誌として発行

ゲームメーカーからの依頼

スーパーマリオのヒット、ドラゴンクエストの大ヒットで、ファミコンゲームの本は、何でも出せば出しただけ売れました。

徳間書店のＳｕｚｕ氏から、北海道の札幌にあるデービーソフトというゲームメーカーから、新作のファミコンソフトの発売に合わせて自社から攻略本を発行したいので、編集プロダクションを紹介して欲しいと頼まれていると話をいただきました。

私は快諾してすぐに札幌のデービーソフトまでスタッフと一緒に打ち合わせに行きました。開発途中のソフトを見せてもらったり、開発メンバーの若者達と直接話をする機会を得ることができました。

それまで、ゲームメーカーの営業担当者と話をすることは出来ても、開発チームと直接話をすることはできませんでした。

北海道と東京の間を何回も往復する取材経費などを考えると赤字になってしまう様な仕事だったのですが、目先の利益以上の経験ができると感じ、この仕事を引き受けたのでした。

ファミコンソフト発売と同時に、ゲームメーカーのデービーソフトから発行された「ヴォルガードⅡテクニックブック」「ＦＬＡＰＰＹテクニックブック」